

修士論文(要旨)

2019年1月

集団(家族・友人・大学・アルバイト先)に対する帰属意識と
自尊感情および他者受容との関連

指導 山口 一 教授

心理学研究科
臨床心理学専攻
217J4013
諸星 眞子

Master's Thesis(Abstract)
January 2019

The Association between Sense of Belonging to a Group (Family, Friends, University,
Place of Employment) and Self-Esteem and Acceptance of Others

Mako MOROHOSHI
217J4013
Master's Program in Clinical Psychology
Graduate School of Psychology
J.F. Oberlin University
Thesis Supervisor: Hajime YAMAGUCHI

目次

I. 問題と目的	1
1-1 はじめに	1
1-2 帰属意識について	1
1-3 自尊感情について	2
1-4 他者受容について	2
1-5 本研究の目的	3
II. 方法	3
2-1 調査時期	3
2-2 調査対象者	3
2-3 調査方法	3
2-4 倫理的配慮	3
2-5 質問紙の構成	4
2-6 分析方法	4
2-7 仮説	5
III. 結果	5
3-1 分析対象者	5
3-2 男女別年齢別の各帰属意識, 自尊感情, 他者受容の平均点と SD	6
3-3 各帰属意識についての因子分析の結果	6
3-4 各帰属意識の高さの違い	7
3-5 男女別・年齢別の分散分析の結果	8
3-6 帰属意識と自尊感情および他者受容との相関	11
3-7 帰属意識が高い集団の数による自尊感情および他者受容の相違	11
IV. 考察	14
4-1 各帰属意識の高さの違い	14
4-2 男女別・年齢別の分散分析の結果	14
4-3 帰属意識と自尊感情および他者受容との相関	15
4-4 帰属意識が高い集団の数による自尊感情および他者受容の相違	15
4-5 総合考察	16
4-6 今後の課題	16
付記	16
引用文献	
添付資料	
添付資料 1 教員宛て調査協力依頼書	-1-
添付資料 2 大学生への調査協力依頼書	-2-
添付資料 3 質問紙	-3-

I. 問題と目的

人は集団との関わりにより心理状態は変化し、時には社会の不適応を起こすことがある。これまでに、個人と集団との関係については様々な研究が行われているが、その中の一つとして集団への帰属意識の研究がある。尾高（1963）によれば、帰属意識とは集団への満足感や信頼感、一員である誇りや支持などを指しているとされる。中村・松田・薊(2015)の調査結果によれば、大学への帰属意識が高いと大学満足度と就学意欲がともに高く、大学不適応は低い傾向を示している。

本研究では、大学だけではなく、家族や友人、アルバイト先といった様々な集団に対する帰属意識について、自尊感情や他者受容との関連性を明らかにすることを目的とする。

II. 研究方法

2-1 調査方法

A 大学の 18～25 歳の男女大学生に質問紙調査を実施した。調査は、桜美林大学研究倫理委員会の承認(2018年7月13日承認, 受付番号 17043)後, 2018年7月から10月に行った。

2-2 質問紙の構成

(1) フェイスシート

対象者の属性に関する質問項目として年齢、性別についての回答を求める。

(2) 大学への帰属意識の尺度（中村・松田・薊, 2013）を改変したもの。

愛着の1因子7項目のみを用い、対象の組織は家族・友人・大学・アルバイト先の各集団とし、それに相応しい表現に改変した。

(3) Rosenberg 自尊感情尺度 (Rosenberg M, 1965) を Mimura C & Griffiths P(2007) が邦訳した日本語版。この尺度は1因子10項目で構成されている。

(4) 他者受容尺度（櫻井, 2009）

この尺度は1因子17項目で構成されている。

2-3 分析方法

得られたデータは、統計的手法を用い、調査結果を分析した。なお、分析には IBM SPSS Ver.25.0 を用いた。

大学への帰属意識の尺度は改変したため、再度因子分析を行い、因子構成を検討した。他の、Rosenberg 自尊感情尺度（日本語版）、他者受容尺度の3つの尺度はそのまま用いた。

上記各尺度の関連は相関分析を用いて検討した。

また、集団に対する帰属意識が高い集団の多少で自尊感情や他者受容が変化するのか、帰属意識の高い集団の個数を独立変数、自尊感情や他者受容を従属変数とした一元配置分散分析を行った。

III. 結果

大学生 359 名に調査用紙を配布し、回収されたものは 214 名分（回収率 59.6%）であった。そのうち、欠損値があるものなどを除き、205 名の調査用紙を分析の対象（有効回答率 95.8%）とした。分析対象者の内訳は、男性 94 名（45.9%）、女性 111 名（54.1%）であった。また、年齢の範囲は 18 歳から 25 歳までであり、平均年齢は 19.9 歳であった。

因子分析の結果、スクリープロットから判断し、各帰属意識尺度とも1因子構造と判断された。

年齢を大学に入学し間もない時期にあたる18～19歳、大学生活に慣れ楽しむようになる時期にあたる20歳、卒業が近づき社会に対する意識も高まる時期にあたる21～25歳の3群に分けて、「年齢」「性別」を独立変数、「各帰属意識」「自尊感情」「他者受容」を従属変数とした2要因の分散分析を行った結果、家族に対する帰属意識について「年齢」「性別」ともに有意な群間差がみられた。年齢については、中群より高群の方が高いという結果が得られた。また、性別については女性の方が高い結果が得られた。その他の友人、大学、アルバイト先に対する帰属意識、自尊感情、他者受容では有意な差が認められなかった。

男女別に各集団に対する帰属意識と自尊感情および他者受容との相関を表1に示す。

表1. 各帰属意識と自尊感情および他者受容の相互相関（男女別）

	家族平均	友人平均	大学平均	アルバイト平均	自尊平均	他者平均
男性 (n = 94)						
帰属意識 (家族) 平均	—	.630**	.552**	.315**	.377**	.207*
帰属意識 (友人) 平均		—	.510**	.377**	.290**	.383**
帰属意識 (大学) 平均			—	.373**	.265**	.194
帰属意識 (アルバイト) 平均				—	.386**	.319**
自尊感情平均					—	.402**
他者受容平均						—
女性 (n = 111)						
帰属意識 (家族) 平均	—	.513**	.194*	.082	.325**	.149
帰属意識 (友人) 平均		—	.282**	.215*	.292**	.314**
帰属意識 (大学) 平均			—	.336**	.324**	.038
帰属意識 (アルバイト) 平均				—	.334**	.166
自尊感情平均					—	.258**
他者受容平均						—

* $p < .05$ ** $p < .01$

男性が自尊感情に有意な正の相関があったのは、家族・友人・大学・アルバイト先であり、他者受容に有意な正の相関があったのは家族・友人・アルバイト先であった。また、女性が自尊感情に有意な正の相関があったのは、家族・友人・大学・アルバイト先であり、他者受容と有意な正の相関があったのは友人となっていた。男女とも自尊感情には様々な集団への帰属意識が、他者受容には、男性は大学以外の帰属意識が、女性は友人への帰属意識が有意な正の相関があることが判明した。また、自尊感情と他者受容において男性は中等度の相関が一部あり、女性は低い相関となり差があることが判明した。

次に、男女別に帰属意識が高い集団の数ごとの自尊感情と他者受容の平均値と標準偏差を表2に示す。

表2. 帰属意識が高い集団の数による自尊感情および他者受容

	※個数	男性			女性		
		度数	平均	SD	度数	平均	SD
自尊感情	0	20	2.28	0.52	14	2.14	0.43
	1	18	2.27	0.49	25	2.33	0.44
	2	22	2.58	0.31	30	2.46	0.40
	3	14	2.71	0.44	25	2.60	0.42
	4	20	2.59	0.35	17	2.64	0.39
	合計	94	2.47	0.45	111	2.45	0.44
他者受容	0	20	3.49	0.56	14	3.53	0.55
	1	18	3.55	0.58	25	3.80	0.47
	2	22	3.88	0.51	30	3.61	0.53
	3	14	4.12	0.54	25	4.08	0.58
	4	20	3.94	0.50	17	3.99	0.40
	合計	94	3.78	0.57	111	3.80	0.54

※個数とは帰属意識の高い集団の個数

帰属意識が高い集団の数による自尊感情および他者受容の相違について、男女別に帰属意識の高い集団の個数を独立変数、自尊感情と他者受容を従属変数とした一要因の分散分析を行った結果、男女とも「自尊感情」と「他者受容」に有意な差がみられた。多重比較の結果、男性の自尊感情においては3種類>1種類、0種類であった。他者受容においても3種類>1種類、0種類であった。女性の場合は、自尊感情が3種類、4種類>0種類であった。他者受容が3種類>0種類、2種類という結果であった。0種類あるいは1種類に比べて、3種類ある方が有意に自尊感情や他者受容が高くなっていた。

IV. 考察

どの集団にあっても帰属意識は自尊感情や他者受容と正の相関があり、帰属意識を高めることが個人の精神面にプラスとなる可能性があることがわかった。また、帰属意識の高さが0種類の方は、数種類持っている人と比べると、自尊感情と他者受容が低くなっており、帰属意識をどの集団にも持てない人は自分に自信が持てず、社会での対応が難しくなると考えられる。したがって、そのような人も帰属意識の高い集団を数種類持つように介入することで、自尊感情や他者受容が高まり、積極的になり社会に適応できることにつながると考えられる。

引用文献

- Mimura C & Griffiths P (2007). A Japanese version of the Rosenberg Self-Esteem Scale: Translation and equivalence assessment. *J Psychosomatic Res.*; *62*, 589-594.
- 中村 真・松田 英子・薊 理津子(2013). 大学生の学校適応に影響する要因の検討-大学不
適応, 大学満足, 就学意欲に着目して-江戸川大学紀要, *23*, 151-160.
- 中村 真・松田 英子・薊 理津子(2015). 大学への帰属意識が大学不適応に及ぼす影響(3)
-帰属意識に基づいて分類した大学生のタイプと大学不適応との関連- *23-31*.
- 尾高 邦雄(1963). 改訂版 産業社会学 ダイヤモンド社, pp.398.
- Rosenberg M. (1965). *Society and adolescent self-image* New Jersey: Princeton
University Press.pp1-3.
- 櫻井 英未(2009). 女子大学生の自己受容および他者受容と精神的健康の関係 日本女子
大学人間社会研究科紀要, *19*, 125-142.
- 上村 有平(2007). 青年期後期における自己受容と他者受容の関連: 個人志向性・社会志向
性を指標として 発達心理学研究, *18(2)*, 132-138.